副詞「まさか」の史的変遷に関する一試論

—使用されるジャンルと意味特徴から—

A Preliminary Study of the Historical Transition of the Adverb *masaka*: with a Focus on its Semantic Characteristics and its Use in the Genre

黄　冬 思
HUANG Dongsi

This paper clarifies the historical transition of the adverb *masaka*. According to the survey, there were 35 cases in the Edo period and 436 cases in the Meiji and Taisho periods. Traditionally, the meaning of *masaka* has been treated as "the denial of the possibility of the establishment of a situation" and "unexpected". However, this paper believes that there is room for a reexamination of the meaning of *masaka*. Therefore, the inferred adverb *masaka* has been classified into three categories according to the presence or absence of "the basis" of its meaning. The case in which "socially accepted ideas, natural laws, logic, or common sense are the basis" is classified as semantic feature 1; the case in which "personal experience or perception is the basis" is classified as semantic feature 2; and the case in which "no basis is provided" is classified as semantic feature 3. This paper examines how the semantic feature of *masaka*, the co-occurring of sentence-final forms, and the genres have changed with the passage of time. As time passed, it became clear that in the Meiji-Taisho period, there was an increase in the number of examples co-occurring with auxiliary verbs expressing negative inference, as well as an increase in the number of "Non-predicate Sentence" usages; on the other hand, since the Showa period, *masaka* was no longer used in sentences of non-literary genres, and semantic feature 1 was found to gradually weaken.

キーワード：　モダリティ副詞，意味の変遷，文末形式，非文芸ジャンル

1. はじめに

否定・否定推量を表す文末形式と共起するモダリティ副詞「まさか」は、江戸中期に初めて観察され出す。用例（1）に示されるように、副詞「まさか」が成立した当初は、否定を表す文末形式「ぬ」と共起し、浄瑠璃のような劇文学のジャンルに使用されている。李

（2019）では、「まさか」の歴史的変化過程が捉えられ、近世期において、名詞的なものが多いのに対し、近世後期から副詞の用法が初めて成立し、その用例数も少ないことが言及されている。現代日本語では、副詞「まさか」は多くの場面、ジャンルで用いられている。それに対し、江戸時代では、副詞「まさか」の使用は江戸後期の人情本に限られている。

（1）新左「刃物で切るは、庭作り・植木屋も切る。木太刀を以て眞直に心の歪みなく、切放した切口。をのれは性根が歪み狂ふて有に仍て斜に切れ、然も切口刀の垢。見たか、身が切口。是でなければまさか人は斬れぬ。コリャ、人には手も有り足も有ぞよ。」
「幼稚子敵討」『日本古典文学大系 53』162 頁

時代が下がり、明治大正時代に入ると、「まさか」の使用は次第に増加する。用例（2）のような文学作品に加え、用例（3）のような評論にも出現するようになる。このように、時代につれて、「まさか」の使用されるジャンルが拡大していくことが考えられる。また、時代とともに、「まさか」と共起する文末形式も変化していく。

（2）今まで彼に随いてそういう所へ行った事は幾度となくあったが、まさかその為に彼がわざわざ下宿へ誘いに来ようとは思えなかった。　夏目漱石（1913）、「行人」
（3）如何に名譽覺の低いものでも、まさか夫には賛成すまい。
兆水漁史（1917）「教育時言」、60M太陽 1917_09002

また、意味の面からは、文末形式にも関連して、「まさか」は（1）（3）のような「事態成立の可能性の否定」（小池（2002））と（2）のような「想定外」（杉村（2000）、小池（2002））の意味も認められ出す。

しかし、後に述べるように、「まさか」の意味については、検討の余地があり、「まさか」の史的変遷についても、様々なジャンルを通じた調査は行われていない。本稿では、先行研究を踏まえて、推量的な副詞群と「根拠」との関わりを観点として、副詞「まさか」の意味特徴を明らかにする。特に、「まさか」が副詞的用法で使われ始めた江戸時代以降の史的変遷を明らかにする。具体的には、意味特徴と共起する文末形式、使用されるジャンルの観点から、「まさか」の史的変遷を明らかにしたい。

2. 先行研究

「まさか」の意味と用法について本格的に論じた杉村（2000）と「まさか」の意味別の史的変遷を詳しく捉えた小池（2002）を概観する。

杉村（2000）は、先行研究で指摘されている可能性の否定や否定推量[1]は「ハズガナイ」や「マイ」などに帰せられる意味であると主張し、「まさか」の根本的な意味が「想定外」にあるとして、以下の分類を示した。

当該の事態の成立について特に考えてなかった場合に、当該の事態が成立すること。
当該の事態が成立する可能性を否定していた場合に、当該の事態が成立すること。
他の事態が成立する可能性を考えていた場合に、当該の事態が成立すること。

次に、小池（2002:15）は、杉村（2000）の「想定外」の規定は全て「当該の事態が成立する」場合に関連しており、「実際には事態が成立していない、もしくは成立する／したかどうかわからないという場合も考えられ、その場合は「想定外」には該当しなくなる」と指摘している。そのため、小池（2002）は、「想定外」の意味を援用しながら、「事態が成立していない」場合では、「事態成立の可能性の否定」の意味があると指摘し、事態が成立しているかどうかによって「まさか」は二つの意味を持つとしている。

(4) 私は、マサカ本当に宇宙飛行士になれるとは思わなかった。（小池 2002:15 の用例 (4)）
(5) マサカ社長にそんなことは言えないよ。（小池 2002:15 の用例 (5)）

小池（2002）によると、用例（4）に用いられている「まさか」は「想定外」の意味を表すのに対し、用例（5）に用いられる「まさか」は「事態成立の可能性の否定」の意味を表していることになる。この意味分類に基づき、小池は明治期から現代までの大衆小説を調査資料として、副詞「まさか」の意味別の出現傾向と共起形式の出現傾向を明らかにした。以下にその要点をまとめる。

1、時代を経るに従って「想定外」の意味を表す用例が増加している（構文的に〈トハ（ナンテ・ナド）＋思考動詞＋ナカッタ〉と共起する場合が多い）。
2、時代が下がるごとに「まさか」が地の文に出現する傾向が高くなる。
3、「まさか」の一語文と言いさし[2]として使用された用例が増加している。
4、「まさか」の共起関係の変遷に基づき、共起するモダリティが減少していく。

[1] 例えば、森本（1994）は「述べられる行為や状態の実現についての蓋然性に関する判断を担っている」副詞をグループ A11 と呼んでおり、「まさか」の意味的特徴については、A11 グループに属する「可能性（または推量された事）の否定」とまとめている。
[2] 「言いさし」は「述語まで言い切らない」用例が該当する（小池 2002:21）。また、「まさか」は一語のみで用いられているが、その後の“……”によって何かを言おうとしたいのだが言えないという感じを表す用例も「言いさし」の用例とされている。本稿では、この定義に従う。

ここでは、小池（2002）における共起する文末形式の変遷を詳しく見ていく。小池（2002）では、「マイ」の減少と「ナイダロウ」の安定（全時期を通じて15%～20%の割合を占める）及び戦後期・現代期における一語文の増加と現代期における「言いさし」の用例の増加が明らかにされている。前者について、「マイ」は「ナイダロウ」のような打消と推量の分離した形に代わっていると述べている。後者について、は「マサカ」に特定のモダリティがやきつけられており、副詞が単独で用いられても、主観的な態度や判断を表わしうると述べている。

以上、小池（2002）において、意味別と出現する文、共起する文末形式の観点から、「まさか」の歴史的変遷が明らかにされている。しかし、そこでの「まさか」の意味と用法に対する指摘は文芸作品（大衆小説）から帰納されたものである。副詞「まさか」の使用される様々なジャンルに着目しつつ、他の資料に調査を広げる必要がある。加えて、「マイ」の減少及び一語文、「言いさし」の用例の増加が論じられている点については、「まさか」と共起する文末形式がどのような文（文芸ジャンル・非文芸ジャンルと会話文・非会話文）に用いられるのかは論じられていない。そのため、他の資料を追加し、「まさか」と共起する文末形式を改めて概観し、各文末形式がどのような文に使用されるのかを明らかにする必要がある。

本稿では、小池（2002）を参考しながら、「まさか」の意味をさらに細分化することを試みる。そして、非文芸ジャンルの文章が含まれた調査資料を用いて、「まさか」の意味特徴と共起する文末形式、使用されるジャンルの観点から、その史的変遷を捉えていくこととする。

3. 用例の調査方法と調査結果について

本稿では、副詞的用法「まさかに」（単純強調の用法や名詞の用法を除外）および副詞「まさか」（名詞の用法と連体修飾用法、感動詞的用法を除外）を研究対象とする[3]。対象となる「まさか」の用例調査に使用した資料及び結果は以下の通りである。

江戸時代の用例検索については、『日本語歴史コーパス』と『新編日本古典文学全集』（小学館）、『日本古典文学大系』（岩波書店）、『噺本大系』（東京堂出版）を利用した。調査方法の詳細は稿末に示す。重なる用例を手作業で取り除いた結果、『日本語歴史コーパス』から28例、『新編日本古典文学全集』（小学館）から4例、『日本古典文学大系』（岩波書店）か

[3] 江戸時代では、「まさかに」の名詞的用1例、「まさか」の名詞的用法3例、「まさか」の連体修飾用法34例である。明治大正時代では、「まさかに」の単純強調の用法3例、「まさか」の名詞的用法1例、「まさか」の連体修飾用法24例、「まさか」の感動詞的用法36例である。ここでは、用例数の提示に留め、これらの用例に対する考察は別稿に譲る。

ら2例、『噺本大系』（東京堂出版）から1例、合計35例が得られた[4]。

明治大正時代については、『日本語歴史コーパス』と『明治の文豪』【CD−ROM 版】（新潮社、1997）、『大正の文豪』【CD−ROM 版】（新潮社、1997）を利用した[5]。後者は文学作品のみであるのに対し、前者は評論・批評のような「非文芸ジャンル」の文章も含まれている。重なる用例を手作業で取り除いた結果、『日本語歴史コーパス』から243例（近代雑誌：157例、文学作品：78例、口語資料：5例、国語教科書：3例）、『明治の文豪』と『大正の文豪』から193例が得られた。また、明治大正時代以降、非文芸ジャンルにおける「まさか」が観察可能となる。本稿では、昭和以降の用例について、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用し、用例を収集した。そこでは、対象用例は合計2574例が得られた。

4. 「推量判断」の「根拠」から見た「まさか」の意味特徴

本節では、工藤（2000）と仁田（2000）を用いて、副詞「まさか」の意味特徴を明らかにするための観点を検討する。

工藤（2000）は、推量的な副詞群は「未確認（未確定）の事態」に対する推量判断を表わすとし、推量的な副詞群を以下のように分類している。本稿で取り上げられている副詞「まさか」は推測のカテゴリーに属している。ほかに、「おそらく」「たぶん」「さぞ」「おおかた」などの副詞がある。

①確　信：きっと、かならず、ぜったい（に）、断じて
②推　測：多分、恐らく、さぞ、定めし、大方／大概、大抵／まさか、よもや／たしか／もしや、さては
③推　定：どうも、どうやら／よほど
④不確定：あるいは、もしかすれば、ことによると、ひょっとしたら／あんがい

仁田（2000:94）は、「推量」を「事態の成立・存在を不確かなものとして、自らの想像・思考や推論の中に捉えたもの」と定義し、「想像・思考や推論の中に事態の成立を捉えるに

[4] 現時点では、得られた用例は全て文芸ジャンルに属するものである。今後、調査資料をさらに拡大していく必要がある。

[5] 『日本語歴史コーパス 明治・大正編』は「雑誌」「教科書」「口語資料」「文学作品」からなっている。「明治大正編I雑誌」における資料の分量が充実しているのに対し、「明治・大正編IV近代小説」では、21 作品だけが収められている（橋本行洋（2021）「近代語の資料とコーパス」田中牧郎・橋本行洋・小木曽智信『コーパスによる日本語史研究　近代編』pp.23-47（ひつじ書房）参照）。そのため、本稿では、文学作品に出現している用例調査では、『明治の文豪』、『大正の文豪』を補足資料として使用した。

あたっては、何らかの根拠が必要になる」と述べている。さらに、「推量」を表すものについては、「ダロウ」と「たぶん」があるとする。

工藤（2000）では、「まさか」と「たぶん」は同一のカテゴリー属している。仁田（2000）における「たぶん」は「推量」を表すことができるという点を踏まえれば、「まさか」についても「何らかの根拠」が「推量」に関わっていると考えられる。

以上のことから、本稿は「まさか」を用いる場合では、「根拠」が介在されると考え、「根拠」がどのようなものかによって「まさか」の意味特徴を規定する。以下、具体的な用例を用いながら、「まさか」の意味特徴を説明していく。

（6）若し政府が議會にも詢らず、大總統の意見をも顧みざるが如き事あらば、議論の上に於ては十分政府を責むべき理由はあらう。併し乍ら今日の政府もまさか其れ程無謀の事は爲ないであらう。只だ今日迄の擧動を見、それに憤慨した丈けにて事を起すが如きは、大に事を誤るものである。

寺尾亨（作）（1917）「支那の連合加入問題と南方派の態度」、60M 太陽 1917_04010

（7）都下中學の中にて有名なる郁文舘、明治義會は、徴兵猶豫の特權を剥がれぬ、嗚呼これ何によりて然る乎。文部省とてもまさか私立學校を撲滅せむとするまでには愚ならざるべし。　大町桂月（1901）「教育時評」、60M 太陽 1901_03011

（8）男の手には短銃があつたが、女の眼附には戯けたやうな色があつた。「窓も扉もみんなすつかり閉つてゐるのだぞ。貴様はまさか空中を歩いてくることは出來やしまい。どうして此處へ來たんだ?」「私もあなたに同じことが訊きたいのよ。」ブラインはたじろいだ。

梅原成基（訳）/ヘルマン・ランドン（作）（1925）『怪奇探偵小説　緑の扉』
60M 太陽 1925_02074

用例（6）において、話し手が否定している内容は「政府が無謀なことをする」可能性である。この可能性は「行政役割をもつ政府は議会の意見を考慮すべきである」という「社会通念」に照らして否定されている。用例（7）と用例（8）では、話し手は「公立学校および国立学校と共立すべきである」および「重力のために人が空中を歩けない」というものを「根拠」とし、「文部省は私立学校を撲滅するほどに愚かである」可能性、「女が空中を歩いてくる」可能性を否定している。

これらの用例では、事態を否定するには、前提を可能とする「根拠」は「社会通念」や「自然法則」などのものとして認められる。一般的には、上記のものに反することは起こりにくいと考えられ、話し手は起る可能性が低いと思われることを否定する必要がないと思われる。それにも関わらず、話し手は否定する必要のないものを敢えて否定している。

そのため、話し手は事態に対する批判もしくは皮肉の態度を表すことが考えられる。文脈に支えられていることにも関連しつつ、似通っている場合に出現している「まさか」は「批判、皮肉」のマイナスイメージを帯びている傾向が窺われる。本稿では、社会通念、自然法則などが根拠であり、それに基づく事態への否定を表す「まさか」の意味特徴を「意味特徴 1」と呼んでおく。

(9) 初めは三人でも、かうして一度口火さへつけて置けば、この次ぎからは、自分と二人きりでも、まさか拒みはしないだらうと、安藤の心はひどく奮んだ。

中村武羅夫(作)(1925)「女人群像」、60M 婦倶 1925_12020

(10)「ええ。波動はありません。既往症を聞いて見ても、肝臓に何か来そうな、取り留めた事実もないのです。酒はどうかと云うと、厭ではないと云います。はてなと思って好く聞いて見ると、飲んでも二三杯だと云うのですから、まさか肝臓に変化を来す程のこともないだろうと思います。栄養は中等です。悪性腫瘍らしい処は少しもありません」 森鴎外 (1911)、「山椒大夫・高瀬舟」

(11) 返事を待ち受ける間の津田は居据りの悪い置物のように落ち付かなかった。ことにすぐ帰って来べき筈の下女が思った通りすぐ帰って来ないので、彼は猶の事心を遣った。「まさか断るんじゃあるまいな」彼が吉川夫人の名を利用したのは、既に万一を顧慮したからであった。夫人とそうして彼女の見舞品、この二つは、それを届ける津田に対して、清子の束縛を解く好い方便に違なかった。

夏目漱石 (1916)、「明暗」

用例 (9) では、話し手が否定している内容はそれぞれ「二人きりの時、自分 (の誘い) が拒否される」ことの可能性である。この用例では、「(初め三人で会って) 口火をつけておく」という文脈の存在が、「次回二人きりになったときに拒否される」可能性を否定する根拠となっている。用例 (10) と用例 (11) では、「飲んでも二三杯だ」および「吉川夫人の名を利用した」という文脈の存在が、「飲酒の量が少ないため、肝臓に変化をもたらす」可能性および「下女が断って帰ってこない」可能性を否定する根拠となっている。

これらの用例は全て何らかの証拠を用いつつ事態を否定している。また、話し手の経験や認識が根拠となっており、それを示す文脈が提示されることもある。話し手は何らかの根拠を提示しつつ論理的な目線から事態が起こらないことを志向している。似通っている文脈に支えられているため、「まさか」は「気がかり、不安」のニュアンスを帯びている傾向が窺われる。本稿では、個人の経験、認識が根拠であり、それに基づく事態への否定を表す「まさか」の意味特徴を「意味特徴 2」と呼んでおく。

（12）単に病院でお秀に出会うという事は、お延に取って意外でも何でもなかった。けれども出会った結果からいうと、又意外以上の意外に帰着した。自分に対するお秀の態度を平生から心得ていた彼女も、まさかこんな場面でその相手になろうとは思わなかった。　夏目漱石（1916）、「明暗」

（13）「なに、行ったこたアないが、いつだったか銀座で逢ったとき名刺をくれたから……」懐から大きな三つ折りを取り出して、回数券などを入れて置く革の二つ折のなかをあちこち探していたが、「ああこれだ」「ちょいと拝見」瀬川は、手を差し延べて、「あいつ名刺なんぞ持って歩いて、一体どうする気なんだろう」「客をひく気でしょう」「まさか……」もう一度二人は大笑いに笑った。

里見弴（1922）、「多情仏心」前編

（14）然し、また、今夜は、うちにゐないだけ、何も事件がありさうでない――まさか外で毒薬を服用しようとは！渠は風邪の熱を出さうとして、水を大きなコツプに三四杯飲み、独りで寝どこを敷いて、そこへもぐり込んだ。

岩野泡鳴（1914）、「毒薬を飲む女」

用例（12）と用例（13）、用例（14）は事態が実現している場合の用例である。この 3 つの用例では、話し手は「まさか」を用いて既に実現している事態、「病院で再会することを予想した」ことの可能性および「客をひく」ことの可能性、「渠は女が首つりではなく、毒薬を飲んで自殺することを考えた」ことの可能性を否定している。これらには事態の実現に関わる根拠を提示する文脈が存在していない。特に、用例（13）と用例（14）では、話し手が実現した事態に即応し、その事態を否定して初めて事態に対する把握ができており、「驚き」の態度を帯びたのである。対し、用例（12）では、思考動詞の否定形式「思わなかった」が文脈に用いられている。文の全体的な意味から言うと、話し手は「こんな場面で再会する」ことを考えたことがないという意味になり、事態の実現に対する「予想外」[6]の態度を表出している。「根拠がなし」とされている用例における「まさか」は「驚き、予想外」のニュアンスを帯びている傾向が窺われる。

また、下記の用例に示されるように、事態が実現しているかが分からない場合でも、「まさか」は「驚き、予想外」のニュアンスを持つことがある。それは「温泉へ行くことをいう」可能性および「一緒に汽車に乗って来た男が御賀さんである」可能性を否定する根拠が提示されていないためである。本稿では、これらの用例で使用されている「まさか」の意味特徴は「意味特徴 3」と呼んでおく。

[6] 『角川古語大辞典（第五巻）』（1999:390）は、副詞「まさか」の意味を「打消しの語を伴って、その実現は予想外であることを強調する表現」と記述している。杉村（2000）と小池（2002）は、同じ意味で「想定外」という表現を用いている。

(15)「こうならない前」という言葉は曖昧であった。津田はその意味を捕捉するに苦しんだ。肝心のお延には猶解らなかった。だから訊かれても説明しなかった。津田はただぼんやりと念を押した。「まさか温泉へ行くことをいうんじゃあるまいね。それが不都合だと云うんなら、已めても構わないが」お延は意外な顔をした。

夏目漱石（1916)、「明暗」

(16)「花嫁は君、この家の娘さ。御聟さんは又、代議士の候補者だから面白いじゃないか――」「ホウ、代議士の候補者？まさかあの一緒に汽車に乗って来た男じゃ有ますまい」「それさ、その紳士さ」

島崎藤村（1906)、「破戒」

以上の検討を受けて、「まさか」の意味特徴を改めて整理し、下記のようにまとめた。

意味特徴 1:社会通念もしくは自然法則、論理、常識が根拠であり、それらにそぐわない事態への否定を表す。

意味特徴 2:個人の経験、認識が根拠であり、成立する可能性が低い事態への否定を表す。

意味特徴 3:事態の成立に関する根拠が直接に提示されておらず、予期していない事態への否定を表す。

つまり、「まさか」は基本的に事態を否定しているが、事態に関する「根拠」がどのようなものかによって「まさか」の意味特徴が分かれるということである。また、例外があるとはいえ、3 つの意味特徴を表す用例では、「まさか」はそれぞれ異なるニュアンスを持つ傾向が窺われる。その傾向を具体的に説明していくと、意味特徴 1 として使用されている「まさか」は「批判、皮肉」のようなマイナスイニュアンスを帯びているのに対し、意味特徴 2 として使用されている「まさか」は「気がかり、不安」のようなニュアンスを帯びている。対し、意味特徴 3 として使用されている「まさか」は「驚き、予想外」のようなニュアンスを帯びていることになる。

5. 「まさか」の変遷について

本節では、江戸時代から昭和以降にかけて、「まさか」の史的変遷を捉える。5.1 節では、4 節の分類を踏まえて、江戸時代から「まさか」の意味特徴がどのように変遷しているのかを述べる。5.2 節では、「まさか」と共起する文末形式を調査し、文末形式の変遷を明らかにする。5.3 節では、「まさか」の使用されるジャンルに注目し、使用するジャンルの変遷を明らかにする。

5.1 「まさか」の意味特徴の変遷

まず、江戸時代の用例を検討する。江戸時代において、副詞「まさか」の出現する資料及び「まさか」の意味特徴を表 1 にまとめた（本稿の図表は全て筆者作成）[7]。なお、用例の分類については「会話」「非会話」の区別を行った。表 1（文学作品：江戸時代）と表 2（雑誌コーパス）における区別は、会話などの本文の種別や話者の情報が付与されている『日本語歴史コーパス』の提示に従った。表 3（文学作品：明治大正時代）については、「」『』で示されている対話および心和文を「会話」とした。地の文を「非会話」とした。

表 1.　文学作品における「まさか」の意味特徴（江戸時代）

ジャンル	資料	成立年	意味特徴 1		意味特徴 2		意味特徴 3		計
			会話	非会話	会話	非会話	会話	非会話	
浄瑠璃	幼稚子敵討	1753	1						1
黄表紙	江戸春一夜千両	1786				1			1
洒落本	繁千話	1790				1			1
滑稽本	浮世風呂	1809			1				1
人情本	明烏後の正夢	1822					1		1
洒落本	色深狭睡夢	1826					1		1
	花街寿々女	1826	1		2	1			4
人情本	春色梅児与美	1832			2				2
	恋の花染	1833	1						1
	春色辰巳園	1834			4				4
	春告鳥	1836			2				2
	花廼志満台	1838	3		7	1	1		12
	春色連理の梅	1858			2		1		3
	春色三題噺	1864			1				1
計			6		21	4	4		35

[7] 今回、「まさか」の意味特徴を規定するには、主に明治大正時代の用例を使用した。江戸時代の用例が 35 例しか得られなかったため、江戸時代の用例を体系的な観点から分析することができなかった。今後、非文芸ジャンルの用例をさらに収集した上で、体系的な観点から江戸時代の用例に対する考察を試みたい。

（17）強「フム何様な目に逢た。女なら廻りでもとられたかと思ふが。まさか盲目のお釜を取奴もあるめへしハヽヽヽヽ。どうした」（意味特徴 1）

松亭金水（1836）「花廼志満台」四編巻之上 1 ウ、53-人情 1836_01002

（18）勝「モシお吉さんとやら。先刻も入ざるお世話だと言なさるけれど。私もコノ娘とは些遁れねへ中の者で斯して来合せて居て見りやア。まさか知らん皃をしても居られやせんから左様言が。（意味特徴 2）

松亭金水（1838）「花廼志満台」四編巻之中、8 オ 53-人情 1838_01011

（19）誰しも始めてこんな所へ来た時は西を見ても東を見てもしらねへ人ばつかり何だか様子はしれず地獄へでも落たよふにおもふものだが。まさか居馴て見るとそんなに恐ろしい所でもねへのさ。（意味特徴 3）

為永春水（1824）「明烏後の正夢」五編巻之十五 13 オ、53-人情 1824_08014

1753 年成立の『幼稚子敵討』に初めて観察された（用例（1））副詞「まさか」は、1864 年にかけて、江戸時代では 35 例しか観察されていない。用例（17）のような意味特徴 1（社会通念もしくは自然法則、論理、常識が根拠である場合）として使用されている用例は 6 例である。用例（19）は吉原の遊女であるお里の発話である。この用例では、主人公のお里が初めて遊郭で勤めたときの感情が描かれているが、「遊郭が恐ろしい所ではない」を表す「根拠」が提示されていない。用例（19）のような意味特徴 3（根拠が提示されていない）として使用されている用例は 4 例である。対して、用例（18）のような意味特徴 2（個人の経験、認識が根拠である場合）として使用されている用例は最も多く、25 例である。しかし、110 年の間に、用例は 35 例観察されるのみである。「まさか」の意味特徴を通時的に検討することは難しい。

明治大正時代に入ると、全用例 436 例の中、雑誌コーパスと文学作品に出現している副詞「まさか」の用例は 428 例に達した。それに対し、当該期では、「安愚楽鍋」と「春秋雑誌会話篇」、「百一新論」、「文明田舎問答」のような口語資料に出現している用例は 5 例、国語教科書に出現している用例は 3 例のみであった。この結果を受け、本節では、雑誌コーパスと文学作品に出現している「まさか」の意味特徴を表 2（雑誌）と表 3（文学作品）にまとめた[8]。

[8] 1900 年以前、1901 年-1910 年、1911 年-1920 年、1921 年-1930 年、1930 年以降のような時代区分に基づき、雑誌コーパスと文学作品に出現している用例をまとめて分析した。その結果は両者を分けて得られた結果とほぼ一致している。そのため、雑誌コーパスと文学作品を分けて考察することは結論に支障がないと考えた。

表 2.　雑誌コーパスにおける「まさか」の意味（明治大正時代）

調査資料	意味特徴 1				意味特徴 2				意味特徴 3				計
	文芸		非文芸		文芸		非文芸		文芸		非文芸		
	会話	非会話	会話	非会話	会話	非会話	会話	非会話	会話	非会話	会話	非会話	
1874　明六雑誌				1									1
1894-95　女学雑誌	2				4			2	1			1	10
1895　太陽	1		1	2	1		1	2				2	10
1901　太陽			1	4	2		1	1	1	1			11
1909　太陽		2	2	12	7	1			3	1	2		30
1909　女性世界				4	1	2	3	7		1		5	23
1917　太陽	2			7	4			4	1			2	20
1925　太陽	3		4	7	1	2	1	7	4	1		5	35
1925　婦人倶楽部			1	1	4	5	3	1	2				17
計	8	2	9	38	24	10	9	24	12	4	2	15	157

用例（20）と用例（21）、用例（22）は雑誌コーパスの用例である。雑誌コーパスによる調査では、意味特徴 1 として使用されている用例は 57 例、意味特徴 2 として使用されている用例は 67 例、意味特徴 3 として使用されている用例は 33 例である。

（20）こんな無用の長物は、一日も早く滅ぼしてしまへといふ考ならば、其れは別問題であるが、まさかに其の様な無法の考へが當局にあるわけが無いとすれば、文藝發達のために、標準を公開して、是非の差別を明白にして貰いたい。　（意味特徴 1）

長谷川天渓（1909）「文藝時評　主觀に別るる苦痛」、60M 太陽 1909_10044

（21）『まあ姉様も察しが悪い……こんな大きな者達に父様の母様のつて云はれちや樂屋を見られたも同様ですもの置いてきぼりされるのは當然ですわ』『まさか兄様とも云へないしね』と二人とも笑ひころげる。　（意味特徴 2）

ゆふがほ（1909）「當世富豪の家庭」、60M 女世 1909_08028

（22）其時、私は源氏徒然草の類を讀まうとこそ思ふたけれど、まさかたまに手にする本が割烹の本で有るとは夢にも思ひ設けなかつた、噫花子さんは。　（意味特徴 3）

浅井千代子（1909）「片昔」、60M 女世 1909_05051

雑誌コーパスでは、1874 年の『明六雑誌』の 1 例を除き、時代を前半（1894 年−1909 年）と後半（1909 年−1925 年）に分けて、各意味特徴の占める割合（小数点以下 1 桁に四捨五入）を計算した。意味特徴 1 として使用されている用例の割合は 36.9%と 34.7%である。意味特徴 2 として使用されている用例の割合は 41.7%と 44.5%である。また意味特徴 3 として使用されている用例の割合は 21.4%と 20.8%である。このように、時代が下がっても、3 つの意味特徴として使用されている用例の割合に大きな変化はないことが分かった。

次に、明治大正時代の文学作品に出現している用例を検討する。一部昭和以降の作品も含むが、同一作者による文章として、考察の対象とした。

表 3.　文学作品における「まさか」の意味（明治大正時代）

成立年代	意味特徴 1		意味特徴 2		意味特徴 3		計
	会話	非会話	会話	非会話	会話	非会話	
1870 年-1900 年	3		11	2	3	1	20
1901 年-1910 年	6	1	38	28	21	3	97
1911 年-1920 年	5	3	37	24	21	15	105
1921 年-1930 年	2		10	4	18	2	36
1930 年以降		1	3	2	4	3	13
計	16	5	99	60	67	24	271

(23)「まさか親の身として、そんなに食うな、三杯位にして節えて置け、なんて過多吝嗇したことも言えないじゃないか」　（意味特徴 1）

島崎藤村（1906）、「破戒」

(24)「二人で一人の男に惚ていたのじゃないか」「そうかも知れません」「それなら彼奴は捨てられたのだ。可愛そうに」「なアに平気な者です」「まさか平気でもあるまい。可愛そうに」と僕は頻りと可愛そうがっても婆やさんは澄したもので「だって最早腹が膨れて来たじゃアありませんか」と言った。　（意味特徴 2）

国木田独歩（1907）、「渚」

(25)「わたしは元服を済ますまで盃を手にするなって、吾家の阿爺に堅く禁じられていますよ」と勝重はすこし顔を紅める。「まあ、そう言わなくてもいい。きょうは特別だ。時に、勝重さん、どうです。君なぞは幕府が倒れると思っていましたかい」「まさか幕府が倒れようとは思いませんでした。徳川の世も末になったとは思いましたがね」

（意味特徴 3）

島崎藤村（1932）、「夜明けの前」

（23）から（25）までの用例は文学作品の用例である。明治大正時代の文学作品では、「まさか」が意味特徴 1 として使用されている用例が最も少なく、21 例のみであった。用例数が少ないため、明治大正時代における意味特徴 1 の変化については明確には判断できない。それに対し、意味特徴 2 として使用されている用例は最も多く、合計 159 例である。時代が下がるにつれてその割合が減少している。また、意味特徴 3 として使用されている用例は 91 例であり、1901 年から 1930 年までの間、年代ごとに意味特徴 3 として使用されている用例の割合は 24 例（24.7%）と 36 例（34.3%）、20 例（55.6%）のように増加している傾向が見られた。

以上、本節では、明治大正時代では、「まさか」の意味特徴がどのような使用傾向があるのかを見てきた。大きな傾向として、意味特徴 2 として使用される用例の減少と意味特徴 3 として使用される用例の増加が認められた。

5.2 「まさか」と共起する文末形式の変遷

本節では、「まさか」と共起する文末形式の変遷を明らかにする。今回の調査では、「まさか」と共起する文末形式を 8 項目に分類できる[9]。ここでは、用例を取り上げながら、「まさか」と共起する文末形式を説明していく。

①「ない・ぬ・ず・ございません」のような否定を表す助動詞と共起する例。

（26）小六「こゝの宅のお吉さんといふは女の髪結さんで。たび／＼奥へも来るから。心やすくそれでまさか途中ではなしも出来ねへから。」

松亭金水（1836）「花廼志満台」初編巻之中 3 ウ、53-人情 1836_01002

（27）世間では同じ穴の貉といへる諺有れど、まさか此場合には適切とは思れず、去り乍ら本氣になつて夫をも證據呼はりせらるるは、片腹痛き限なり。

野口寧斎（1895）「韻語陽秋」、60M 太陽 1895_06034

（28）中には随分職人の真似をして、小店と云う所を冷かすのが面白いなどと云って、不断も職人のような詞遣をしている人がある。しかしまさか真面目に声色を遣って歩く人があろうとは、末造も思っていなかったのである。　森鴎外（1915）、「雁」

[9] 杉村(2009)は「まさか」と共起する文末表現についても、「ナイダロウ」「マイ」「トハ思ワナイ」「トハ思ワナカッタ」「トハ知ラナカッタ」「ワケニハイカナイ」「モノカ」「ワケガナイ」「ハズガナイ」を挙げている。本稿では、杉村（2009）の分類を抜粋し、「ない・ぬ・ず・ございません」、「まい・まじ・ないだろう」「わけがない類」「はずがない類」「ものか類」という 5 つの分類を設けた。さらに、共起する文末形式が省略されているものを「言いさし」の用例、「省略」の用例に分類した。また、「信じかねる」「言いかねる」のような肯定形式と共起する用例を「する∅」の分類に入れた。

②「まい・ないだろう」のような否定推量を表す助動詞と共起する例。

(29) 馬「すこし髪の毛のみだれて顔へかゝりしまで艶きなり。一体茶屋への義理で出た事なれば、まさか捨ててもをかれまい、と来て障子をさらりと明る。馬はうつかりとして居たるが、びつくりして煙管をはたき、宿衣をひきかぶる。」

京伝 (1790)、「繁千話」

(30) 世故の閲歴深きもの、多くは以て品題し得らる、御江戸下りの講談が、隠藝として天下に發表せられしは、君に取りて嬉しきか嬉しからざるか、まさか小説の種にもなるまじ。 野口寧斎 (1895)「韻語陽秋」、60M 太陽 1895_10011

(31)「どうして来たのだ」「去年の暮からウラジオストックにいたの」「それじゃあ、あのホテルの中にある舞台で遣っていたのか」「そうなの」「まさか一人じゃああるまい。組合か」「組合じゃないが、一人でもないの。あなたも御承知の人が一しょなの」

森鴎外(1910)、「山椒大夫・高瀬舟」

③述語まで言い切らない「言いさし」の例。

(32) ト「すこしかんがへ」「そりやアほんとに気があるのだろふぜ。」ト「ほれた心よりまわり気もでるものなり」きく「ナニまさか私に」房「どうして由断はならないヨ。随分人一倍その方へかけてはすばしツこい方だからどうも何ともいへないテ。」

梅暮里谷峨(1858)「春色連理の梅」四編巻之十二 5 オ、53-人情 1858_07010

(33) 老母はそんなことを言ひながら、老人を自分の居間に連れて行つて、伜とアンナのことをざつと話した。『まさかお前、あのヨハンネスが、義務も名譽も忘れるやうな、そんな馬鹿なことが。』老人は意外なことに驚いて、ぽんぽんしながら言つた。

細田民樹(訳)/ハウプトマン(1925)「さみしい人々」、60M 婦倶 1925_12189

(34) こんな事を考えていると、何だか二人がくすくす笑い出した。笑い声の間に何か云うが途切れ途切れで頓と要領を得ない。「え？どうだか……」「……全くです……知らないんですから……罪ですね」「まさか……」「バッタを……本当ですよ」

夏目漱石 (1906)、「坊っちゃん」

④「まさか」と共起する部分が現れず、「まさかと思う（もしくは「思う」の活用形）」の形で出現している「省略」の例。

(35) ―もうこれ迄と思ひ切つたらしく、皆は答案を先生の許に出す、と、先生は一渡り生徒を御覧になつて出て行かれた。まさかと思つてゐたのに、今日あんまり不意に試験をやられたので、皆、不安の面もちして無言の儘教室内に控へて居る、ほんに静かだと思つてゐると、（略）

浅輪久子（1909）「試験の後」、60M 女世 1909_16064

(36)「さぞ美くしかったろう。見にくればよかった」「ハハハ今でも御覧になれます。湯治場へ御越しなされば、屹度出て御挨拶をなされましょう」「はあ、今では里に居るのかい。矢張り裾模様の振袖を着て、高島田に結っていればいいが」「たのんで御覧なされ。着て見せましょ」余はまさかと思ったが、婆さんの様子は存外真面目である。

夏目漱石（1906）、「草枕」

⑤「わけがない類」と共起する例。

(37) 寿楽「ヱヽヱ。あの日は。などゝ申わけをすることもないがモシ茶見世なぞといふものもおつなものでまさか私どものちよいと休むにも毛なみを嫌ふわけはないが（略）」　　為永春水（1834）「春色辰巳園」二編巻六 3 オ、53-人情 1834_04006

(38)「云うだけじゃ仕方がないじゃないか」「まさか催促する訳にも行かないでしょう」「なに呉れるものなら、催促して貰ったって、構わないんだが――只世間体がわるいからね。いくらあの人が学者でも此方からそうは切り出し悪いよ」

夏目漱石（1907）、「虞美人草」

(39) 何ぜなれば、露國のリーリツク號を英國に注文するや、ありとあらゆる干沙をした爲めに、注文を受けた會社も、ほとほと困り切つた上に、まさか注文者の干渉を排斥する譯に行かないから、

洋々生（1909）「名士の露西亞觀　戰後の露國海軍」、60M 太陽 1909_08051

⑥「はずがない類」と共起する例。

(40)『お前ぢやアあるまいし、ね、そんな卑怯な男でもなからうよ。』食事中の話だが、渠にはまだ自分に対する相当の自信があつた。北斗にして、若し――さうだ、金はできないかも知れぬが、それに対する報告をまで避けることは、以前の恩義若しくは関係から云つても、まさかあるべき筈でないと思はれた。

岩野泡鳴（1920）、「憑き物」

(41) 夏でも火をたやさぬ大きな炉辺に、橋本家の一族郎党のにぎやかな食事がはじまるのである。三吉もここではじめて顔をだす。ただ橋本家の長男正太の顔が欠けている。まさか東京から三吉らが来たことは知らぬはずはなかろうに、正太は遊びにでたまま帰ってこないのである。　　島崎藤村（1910）、「夜明けの前」

⑦「ものか」類と共起する例。

(42)「そんな事がまさか無躾に聞かれるもんですか。」

夏目漱石（1907）、「虞美人草」

(43) 青海「ですからもう聞きますよ。聞くから何卒話して下だされ！」多美子「話すつて、先刻云つた通りですが、私なんぼ何だつて、まさかあんな老爺さん所へ、自分で好んで行くもんですか…けれども、其所が親の爲めなんですワ。」

巌谷小波（1909）「喜劇　まぜっかへし」、60M 太陽 1909_01058

⑧「する∅」のような平叙文の例。

(44) 息子「先、誰にしたものだろう。初対面から身請けの相談といふは聞いたが、新造を出してやるとは、今が初めてだ。まさか頼んだら、よふかし」

山東京伝（1786）、「江戸春一夜千両」

(45) それを告げに夫人のところへ走って行く。まさかそれが旦那だとは夫人も言いかねて、貉が犬でもあろうから棒で突ッついて見よなぞと言い付けると、早速下男が竹竿を取り出して来て突こうとするから、たまらない。

島崎藤村（1935）、「夜明け前（第二部）」

以上の分類を用いて、「まさか」と共起する文末形式を概観してきた。「まさか」と共起する文末形式の変遷を見るため、上述した分類を踏まえて、江戸時代と明治大正時代における「まさか」の用例を表 4 にまとめた。

表 4.　「まさか」と共起する文末形式の変遷について

成立年代		ない・ぬ・ず	まい・まじ・ないだろう	言いさし	省略	わけがない類	はずがない類	ものか類	する∅	計
江戸時代	1753 年-1800 年	2	1							3
	1801 年-1864 年	17	10	3		1			1	32
	計	19	11	3		1			1	35
明治大正時代	1859 年-1900 年	18	21	4	1				2	46
	1901 年-1910 年	47	74	13	6	14	2	2	3	161
	1911 年-1920 年	35	57	16	4	11	1	1		125
	1921 年-1930 年	23	39	12	3	8		2	1	88
	1930年以降	7	4	1	2	1			1	16
	計	130	195	46	16	34	3	5	7	436

表 4 の調査結果に基づき、「まさか」と共起する文末形式がどのように変遷しているのかを説明する。まず、全時代を通じて、「まさか」は否定・否定推量を表す助動詞と最も共起し、江戸時代 30 例（85.7%）、明治大正時代 325 例（74.5%）である。しかし、江戸時代では、否定を表す助動詞と共起する用例は 19 例（54.3%）、否定推量を表す助動詞と共起する用例は 11 例（31.4%）であるのに対し、明治大正時代では、否定を表す助動詞と共起する用例は 130 例（29.8%）、否定推量を表す助動詞と共起する用例は 195 例（44.7%）である。時代が下がるにつれて、否定を表す助動詞と共起する用例の割合が低くなっているのに対し、否定推量を表す助動詞と共起する用例の割合は高くなっている。

そして、「言いさし」の用例は、1901 年−1910 年の 13 例（8.1%）、1911 年−1920 年の 16 例（12.8%）、1921−1930 年の 13 例（13.8%）である。このように、時代の変遷につれて、僅かでありながら、「言いさし」の用例は増加していることが窺える。この傾向は昭和時代

にも受け継がれており、BCCWJ の調査結果では、対象用例 2574 例のうち、「言いさし」の用例は 629 例（約全体用例の 4 分の 1）である。

続いて、「まさか」と共起する文末形式が用いられる文を明らかにする。ここでは、「ない・ぬ・ず」及び「まい・まじ・ないだろう」のような否定・否定推量を表す助動詞、「言いさし」、「わけがない類」を取り上げる。

まず、否定と否定推量を表す助動詞と共起する用例の出現する文を見ていく。江戸時代では、全ての用例は文芸ジャンルである。この中、否定を表す助動詞と共起する用例は、会話文 18 例、非会話文 1 例である。否定推量を表す助動詞と共起する用例は、会話文 10 例、非会話文 1 例である。明治大正時代では、否定を表す助動詞と共起する用例は文芸ジャンル 100 例（77.0%）、非文芸ジャンル 30 例（23.0%）であり、否定推量を表す助動詞と共起する用例は文芸ジャンル 145 例（74.4%）、非文芸ジャンル 49 例（25.1%）、国語教科書 1 例（0.5%）である。このように、否定と否定推量を表す助動詞と共起する用例は文芸ジャンルと非文芸ジャンルに出現する割合の差が殆どないと言える。しかしその一方、否定を表す助動詞と共起する用例は会話文 66 例（50.8%）、非会話文 64 例（49.2%）であるのに対し、否定推量を表す助動詞の用例は会話文 117 例（60.0%）、非会話文 78 例（40.0%）である。このように、「まい」「ないだろう」のような否定推量を表す助動詞は会話文でより好まれて使用される傾向があると考えられる。

「言いさし」の用例は、文芸ジャンル 47 例、非文芸ジャンル 2 例であって、会話文 46 例、非会話文 3 例である。文芸ジャンルの会話文に出現する用例が圧倒的に多いことが窺われる。福島（2008）は言語変種の属性を「言語表現内の情報完結度」によって区別している。このうち、「言語表現内の情報完結度が低い」言語変種（≒口頭言語）は、共有している状況や既有知識に多く依存するものであり、言語化された部分における情報全体を理解するための手がかりが相対的に少ない。会話文では、話し手と聞き手が対面的な状況にあり、その場の情報が共有されていることが多い。そこでは、言語化された部分、つまり会話の内容は、必ず述語が完備した文になるとは限らない。表 4 からみると、江戸時代と明治大正時代では、「まさか」は否定・否定推量を表す助動詞と最も共起している。「まさか」が先行すれば、後の内容が不十分であっても省略された述語（否定・否定推量の意味）が想起されやすく、「まさか」の「言いさし」は会話文に多く使用されることになったと考えられる。

最後に、「わけがない類」と共起する 35 例は、江戸時代は 1 例、明治大正時代は 34 例である。この 34 例は、文芸ジャンル 26 例（74.3%）、非文芸ジャンル 9 例（25.7%）である。対し、会話文は 18 例（51.4%）、非会話文は 17 例（48.6%）である。他の文末形式と比べて、この割合は「ない・ぬ・ず」と共起する用例の出現する割合と近似している。また、

BCCWJ の 2574 例において、「わけがない類」と共起する用例は 141 例のみである。「わけがない類」と共起する用例が多いことが明治大正時代の特徴として指摘できる。

以上、「まさか」と共起する文末形式を 8 項目に分類した上で、時代が下がるにつれて、共起する文末形式がどのように変遷しているのかを見てきた。その結果は 2 点にまとめられる。まず、全時代（江戸時代及び明治大正時代、昭和以降）を通じて、否定・否定推量を表す助動詞と共起する用例が最も多いことが明らかになった。しかし、江戸時代では、否定を表す助動詞と共起する用例が最も多いのに対し、明治大正時代では、否定推量を表す助動詞と共起する用例が最も多い。そして、明治大正時代及び昭和以降では、「言いさし」の用例が増加していることが明らかになった。一方、本節では、各文末形式が用いられる文（文芸ジャンル・非文芸ジャンルと会話文・非会話文）を考察してきた。否定推量を表す助動詞と共起する用例が会話文に多用される傾向と「言いさし」の用例が文芸ジャンルの会話文に出現しやすい傾向が明らかになった。また、「わけがない類」と共起する用例が明治大正時代により多く使用されることが明らかになった。

5.3 使用されるジャンルの変遷と意味特徴の変遷

本節では、副詞「まさか」が初出して以降、使用されるジャンルがどのように変遷しているのかを明らかにする。

江戸時代で使用されている副詞「まさか」が用いられた 35 例は全て文芸ジャンルに出現している[10]。その内訳は、人情本（26 例）、洒落本（6 例）、滑稽本（1 例）、黄表紙（1 例）、浄瑠璃（1 例）である。

明治大正時代に入ると、副詞「まさか」が用いられた用例は 436 例である。文芸ジャンルに出現している用例は 331 例であるのに対し、非文芸ジャンルに出現している用例は 101 例である。残りの 3 例は国語教科書に出現している。昭和以降、「まさか」は相変わらず様々なジャンルに出現している。

ここでは、「まさか」が非文芸ジャンルで用いられている 101 例（雑誌記事 97 例と口語資料 4 例）に注目していきたい。非文芸ジャンルに用いられている用例の中で、意味特徴 1 として用いられている用例は 50 例（雑誌コーパス 47 例と口語資料 3 例）である。それに次いで、意味特徴 2 として用いられている用例は 34 例である。意味特徴 3 として用いられている用例は 17 例である。

---

[10] 今回、武士の日常を記録する日記である『鸚鵡籠中記（上、下）』（岩波書店）および社会を批判する『世事見聞録』（岩波書店）のようないわゆる非文芸ジャンルの文章から「まさか」の用例を収集したが、対象用例が得られなかった。そのため、今回では、江戸時代の用例に対する考察は文芸ジャンルにとどまることになった。今後、非文芸ジャンルの資料をさらに増やして調査を行いたいと考えている。

このような調査結果を踏まえると、明治大正時代では、「まさか」が非文芸ジャンルの文章、特に雑誌記事に使用されるようになったこと、および意味特徴 1 は非文芸ジャンル（論説・史伝・政治・科学・社会・海外思想）の文章に多用されることが分かる。

（46）我々日本人の書いたものを禁止するならば、なぜゾラやモオパツサンの原書や英譯の續々輸入されるのに向つて、發賣禁止を命じないか。まさか當局者は英語が讀めぬといふ譯でもあるまい。

佐藤紅緑（1909）「發賣禁止の命を受けたる時の感想子供に突き當る自働車」、60M 太陽 1909_11040

（47）寺内内閣が眞逆敵國の獨逸に同情する事もあるまいが、軍人中には獨逸が勝つたと云ふ電報を内内喜んで讀んで居る者が無いとは斷言出來まい。

前田蓮山（1917）「各政派の肚の底」、60M 太陽 1917_13007

渡辺（1971）では、「まさか」は後の叙述内容を予告する「誘導副詞」とされている[11]。また、工藤（2013:44）では「文末が全てを決定するので、（略）それを補う表現が必要で、文末に述べんとする態度を前もって示す方策が考えられた、それが陳述副詞である」と述べているように、副詞「まさか」は「話し手の態度を明確に示す」機能を果たしていると考えられる。

用例（46）と用例（47）は「まさか」が『太陽』の論説で用いられている用例である。明治大正時代の雑誌では、論説・史伝・政治・科学・社会・海外思想などあらゆる非文芸ジャンルに関わる記事が網羅されている。これらの記事は単に客観的に事実を述べる文より、書き手の判断および主張を表す文が多く存在している。また、後者は読み手への働きかけがあると思われる。「まさか」の場合は、否定を表す文末形式と共起することが多く、下接の叙述内容に対して否定の意味を付与することで、書き手の主張を一層強めることができる。これによって、否定表現を予告する「まさか」が書き手の主張が強く見られる批評などの文章に多用されることが考えられる。さらに、これらの用例では、書き手は主に社会通念と常識に反していることを否定するので、「まさか」が意味特徴 1 として認められやすい。

前述したように、時代が下がるにつれて、「まさか」が様々なジャンルに用いられている。昭和以降、副詞「まさか」が書籍、新聞、雑誌、国会会議録、ブログ、知恵袋のような BCCWJ のサブコーパスに出現している。さらに、書籍の中の文学、総記、哲学、歴史、社会科学、

[11] 渡辺（1971:312）は通称されている陳述副詞を「誘導副詞」と呼んでおり、「誘導の機能」を「すなわち表現本体は後続する部分にあり、その後続する本体を予告しそれを誘導する、これがこの関係構成的職能の実質である」と説明している。

自然科学、技術・工学、産業などの多岐のジャンルに出現している。副詞「まさか」が文学作品という一つのジャンルに使用されている用例は全用例の 3 分の 2 を占めている。よって現代語では、非文芸ジャンルに出現している「まさか」の用例の割合が減少することになる。その中でも、「まさか」が国会会議録及び新聞で意味特徴 1 として使われている用例が相変わらず観察されている。ただし、時代を経るごとに、社会および政治に関わる文章では、「まさか」が意味特徴 1 として用いられる用例は減少しているように見える。

以上のことを踏まえて、意味特徴 1 は明治時代以降、非文芸ジャンルの文章に用いられやすい傾向が認められたが、昭和以降、副詞「まさか」が非文芸ジャンルに用いられる用例の割合自体が低くなっていき、意味特徴 1 の用例もそれに応じて次第に減少していると予測される。

6. 結論

本稿では、副詞「まさか」の意味特徴を規定した上で、意味特徴及び共起する文末形式、使用されるジャンルの観点から、「まさか」の歴史的変遷を考察した。

まず、「まさか」は基本的に事態への否定を表し、「根拠」がどのようなものかによって「まさか」の意味特徴を 1「社会通念もしくは自然法則、論理、常識が根拠であり、それらにそぐわない事態への否定を表す。」および 2「個人の経験、認識が根拠であり、成立する可能性が低い事態への否定を表す。」、3「事態の成立に関する根拠が直接に提示されておらず、予期していない事態への否定を表す。」と規定した。この上で、副詞「まさか」の意味特徴の変遷を明らかにした。江戸時代では、「まさか」の用例が 35 例しかないため、「まさか」の意味特徴がどのように変化しているのかを通時的に検討することができなかった。それに対し、明治大正時代では、大きな傾向として、「まさか」における意味特徴 2 の減少と意味特徴 3 の増加が認められる。

次に、「まさか」と共起する文末形式の変遷及び各文末形式が用いられる文を見てきた。その要点は 3 つにまとめられる。1、江戸時代から現代にかけて、「まさか」は否定・否定推量を表す助動詞と最も共起している。しかし、江戸時代では、「まさか」は「ない・ぬ・ず」のような否定を表す助動詞と最も共起しているのに対し、明治大正時代では、「まさか」は「まい・まじ・ないだろう」のような否定推量を表す助動詞と最も共起している。また、否定を表す助動詞と共起する用例より否定推量を表す助動詞と共起する用例のほうが会話文に出現しやすいことが認められる。2、明治大正時代では、「言いさし」の用例は僅かではあるが増加していることが明らかになった。さらに昭和以降、「言いさし」の用例を用いる傾向は衰えず観察されている。また、述語が観察されない「言いさし」の用例は文芸ジャンルの会話文に出現する割合が圧倒的に高い。それは対面的な会話では、情報の共有が多く、「まさか」が先行すれば、述語部分が省略されても意思の疎通はできるためであろう。

3、江戸時代及び昭和以降と比べて、明治大正時代では、「わけがない類」と共起する「まさか」の用例がより多く用いられることが指摘できる。

最後に、「まさか」が使用されるジャンルの変遷を見てきた。江戸時代では、「まさか」の用例は全て文芸ジャンルに出現しており、さらに江戸後期の人情本に大部分の用例が観察されている。明治大正時代では、非文芸ジャンルにおける「まさか」の使用が初めて認められ出す。さらに、そこで使用されている「まさか」は意味特徴 1 として認められやすいことが明らかになった。そのため、意味特徴 1 の用例（社会通念もしくは自然法則、論理、常識」を「根拠」とする用例）が論説・評論などが含まれた雑誌記事に用いられており、「まさか」が批判と皮肉のようなマイナスイメージの語として用いられた。しかし、昭和以降、社説のような非文芸ジャンルの文章に出ている「まさか」の用例が減少しており、特に社会もしくは政治に関わる主観的な態度を表明する文章での使用が減少している。そこで、批判的意味合いの「まさか」は、現代のこうした文章では次第に使用されなくなる傾向が強まっていると推測される。

調査資料

今回の用例調査に使用した資料・索引は、以下の通りである。ただし、紙幅の都合により、コーパスを利用した資料の作品名は省略する。

江戸時代:

『鸚鵡籠中記（上、下）』（岩波書店）／『新編日本古典文学全集』（小学館）と『噺本大系』（東京堂出版）、『日本古典文学大系』（岩波書店）所収の諸作品／『世事見聞録』（岩波書店）／日本語歴史コーパス』。なお、国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス』バージョン 2021.3 https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/を利用する際、ウェブ検索ツール「中納言」を使い、語彙素読み「マサカ」をキー検索語にしてデータを収集した。『新編日本古典文学全集』（小学館）、『日本古典文学大系』（岩波書店）、『噺本大系』（東京堂出版）の用例検索にあたり、『日本古典文学大系』および『噺本大系』は国文学研究資料館電子資料館大系本文 DB（https://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/）、『新編日本古典文学全集』はジャパンナレッジ（https://japanknowledge.com/library/）の全文検索を利用した。

明治大正時代:

『日本語歴史コーパス』／『明治の文豪』【CD−ROM 版】（新潮社、1997）、『大正の文豪』【CD−ROM 版】（新潮社、1997）。なお、国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス』バージョン 2021.3 https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/を利用する際、ウェブ検索ツール「中納言」を使い、語彙素読み「マサカ」をキー検索語にしてデータを収集した。

昭和以降：

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（バージョン 2021.03、中納言 2.4.5）https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/を利用。利用する際、ウェブ検索ツール「中納言」を使い、語彙素読み「マサカ」をキー検索語にしてデータを収集した。

参考文献

工藤　浩（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法 3 モダリティ』pp.161-234 岩波書店

工藤力男（2013）「陳述のゆくえ―辞苑閑話・三―」『成城文藝』225、pp.35-45 成城大学文芸学部

小池　康（2002）「現代日本語におけるモダリティ副詞マサカの意味と用法の変遷」『文芸言語研究 言語篇』（42）、pp.13-36 筑波大学　文藝・言語学系

杉村　泰（2000）「モダリティ副詞「マサカ」再考」『名古屋大学　日本語・日本語教育論集』7、pp.11-29

杉村　泰（2009）『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』ひつじ書房

中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（1999）『角川古語大辞典第五巻』角川書店

仁田義雄（2000）「認識のモダリティとその周辺」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法 3 モダリティ』pp.79-159 岩波書店

橋本行洋（2021）「近代語の資料とコーパス」田中牧郎・橋本行洋・小木曽智信『コーパスによる日本語史研究　近代編』pp.23-47 ひつじ書房

福島直恭（2008）『書記言語としての「日本語」の誕生―その存在を問い直す―』笠間書院

森本順子（1994）『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版

李　知殷（2019）「副詞「まさか」をめぐって」『立教大学日本文学』121、pp.120-129 立教大学日本文学会

渡辺　実（1971）『国語構文論』塙書房

付記：本稿の内容は「日本語学会 2022 年度秋季大会（2022 年 10 月）」における口頭発表に基づいたものです。多くの方々から貴重な御教示を賜りましたことを心より感謝申し上げます。